

大地に足跡を残す仕事をしよう

ゆい ひとし
油井 均*

1. はじめに

2019年は長野県にとっても令和元年東日本台風により大きな被害が発生した年でもあった。近年、気象激化に伴う災害が全国で多発している。私が県に入庁した昭和50年代後半に比べれば我が国のインフラは確実に強くはなってきたが、激化する気候変動がもたらす異常気象に追いついていないのが現状ではないだろうか。

本稿は私が前職時代に経験した二つの事柄について話してみたいと思う。

2. 長野オリンピックでの経験

今年は久しぶりのオリンピックイヤーとなる予定だったが新型コロナウイルスの影響で延期となってしまった。まだ30代だった頃、1998年に開催された長野オリンピック冬季競技大会組織委員会事務局（通称NAOC）に4年間出向していた。

担当を任されていたのは輸送。大会関係者の輸送から観客・荷物の輸送・空港におけるCIQ業務など、大会運営にかかるロジスティクスな部分に携わる仕事であった。課の中には行政出身者を始め自動車メーカー、JR、バス会社、運送会社、旅行代理店など多くの業界からの出身者で構成されていた。

そんな中で私はアルペンスキーの志賀高原会場・バイアスロンの野沢温泉会場のパーク&バスライドシステムによる観客の乗り換え駐車場の候補地選定や整備、並びに競技会場近くに設ける大会関係者の駐車場の確保や車両運行管理などを任されていた。

ここで一番問題となったのは志賀高原内に設けなければいけない大会関係者駐車場の確保であった。

国立公園内の普通地域であり、むやみな増設はできない。既存ホテルの駐車場などを借りるしかなかった。そうはいつでも多くの経営者は大会期間中はかき入れ時、商売敵に易々と譲ってくれるわけではない。かれこれ2年間も通いつめ話し合いを重ねてきた。最初は遠かった距離も膝詰めで話すようになってから相手も私を職名ではなく名前で呼んでくれるようになった。私も『〇〇さん、最近調子はどうですか。』などと地元の多くの方々の名前を覚えたものだ。

大会も近づいてきたある時、駐車場の借用にどうしても首を縦に振らない相手に私は業を煮やして『あなた方がイギリスのバーミンガムで旗を振って誘致してきたオリンピックの仕事を私はあなた方に代わってやっているだけだ。あなた方の協力がなければ大会は失敗するだけだ！』と会議の席上大声で啖呵をきってしまった。今にしてみれば若気の至りだったが、それ以来彼らとの距離はさらに縮まり真っ向から反対する人はいなくなった。皆が目指すところは同じであることを改めて確認できたからである。

大会期間中、悪天候によって男子大回転競技がキャンセルされ、回転競技と同日開催となった。明らかに駐車場が足りない事態となったのだが、あるホテルの支配人は組織委員会のお偉方と話しても仕方ない、この私と話がしたいと言ってきた。結果、当初計画よりも多くのスペースが確保され無事に大会を乗り切ったのだが、この時ほど日頃からの顔が見える信頼関係の重要性を認識させられたことはなかった。

*公益財団法人 長野県建設技術センター 理事長（長野県建設技監、建設部長等を歴任）



写真-1 夜間瀬川河川敷に設けられたパーク&バスライド用の臨時駐車場

事業等を進めるにあたってはどうしてもステークホルダーとの交渉は避けて通れない。色々な考えを持つ人々と接しなくてはならない。

まずは反対する人に対して自分側の主張をするだけでなく、相手がなぜそういう主張をするのか考えてみるのが大切である。時間はかかるかもしれないが案外反対する理由が他のところにあたりることが多い。相手の主張を理解し、出来ることと出来ないこと、その理由をはっきりと伝えること、そして何よりも相手との距離を縮めることが重要である。オリンピックでの膝詰めでの経験は私に『交渉術』を身に付けてくれ、その後の技術者としての業務に大いに役に立った。

後に山ノ内町によって編纂されたオリンピック大会記録誌には輸送責任者として30代の若輩者の名前が一番上に連ねられていた。技術者冥利に尽きる仕事をさせていただいたと思っている。

3. 地図に名を残す仕事をしたい

私には前々から疑問に思っていたことがあった。東京都庁や国立競技場、国立博物館などを設計した著名な『建築家』は後世に名前が残るのに、なぜ『土木屋』の名前は残らないのか？浅学な私でも小樽港の北防波堤を設計した広井勇博士や台湾の土木事業に貢献した八田與一の名前くらいは知っていても明石海峡大橋や東京ゲートブリッジ、青函トンネルを設計した人の名前は分からない。そもそもこの世の

中に『建築家』という言葉はあれども『土木家』という言葉は無い。

たぶん、建築物には『意匠』という人間の感性を強烈に表現する手段があって創造した造形の美というものを人々が認めるからであって、トラス構造の橋梁や、砂防堰堤などのある種普遍的土木構造物に人間が創造する美しい作品としての価値を見出す人々は少ないからであろうなどと漠然と思っている。

1) きっかけ

この発端は10数年前に事務所の課長補佐を勤めているとき、たまたま県道にかかる20mほどの小さな橋梁の親柱に当時の県土木部長、事務所長、土木技師などの名前が入った銘板を見つけたことだった。この橋梁は昨年（2011年）の東日本台風で被災し落橋してしまったがそこには戦後間もないコンクリートも満足に入らなかった時代に架けられた橋梁に携わった技術者たちの思いが感じられた。



写真-2 親柱に残された技術者の銘板

2) 夢のある仕事とするために

何年か後、私が建設技監を勤めているとき、業界との意見交換会において人材確保の話題が出され、『やりがいのある仕事』が議論の俎上に上がった。

確かに著名な建築家のように個性の表現は出来ないまでも土木構造物は多くの人々の共同作業によって成り立っている。それらに脚光を浴びせることはできないものかと考えた。

早速、部下に話をすると数日後、“技術者の名前を刻もうプロジェクト”として企画が上がってきた。

そこには発注者の名前だけでなく受注者の名前まで入れる案であったが、私はさらに下請企業や建設資材の提供企業、測量設計コンサルタント、地質業者など業務に携わった技術者の名前を出来る限り入れるように指示した。

出来上がった土木構造物に自分の名前を入れることはその仕事に対する責任の所在を明確にさせることでもあり、ある程度の覚悟の要ることでもある。素晴らしいものを造れば後世の人間が輝かしい評価を与えるだろうし、逆もまた然り。幸いなことにこうした提案は県内の業界からも受け入れられ、著名な観光地である北アルプス上高地へ通じる県道上高地公園線のトンネル銘板の裏側に初めて設置されることになった。

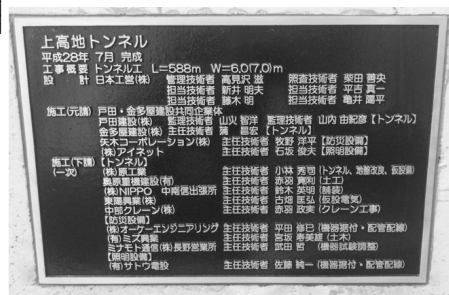


写真-3 上高地トンネルに刻まれた銘板

また、平成30年度に開学した長野県立大学の後町キャンパス（長野市）の学生寮や令和2年3月に竣工した長野県立武道館（佐久市）にも事業に携わった人々の名前が数多く刻まれており長野県では現在でもこのプロジェクトを継続的に実施中である。

それぞれの事業に携わった人々がいつか自分の家族にこれを見せて『これ、お父ちゃんが造ったんだぞ。』とささやかな自慢ができる日が来ることを私は信じたい。例えそれが山奥にひっそりと鎮座している砂防堰堤であってもそれは我が国の国土を自然災害の脅威から守ってくれている大切なピースのひとつなのだ。



写真-4 長野県立武道館に設置された銘板

4. おわりに

幕末の志士、吉田松陰は『夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし、故に夢なき者に成功なし』という言葉を残している。

受発注者共々人材が集まらず、建設業界の未来を危惧する声が多く上がる昨今だが、どうか全国の技術者の皆さん、この国の国土を守るそして築き上げるという技術者の矜持と夢を持ち、ひとりひとりが自分の頭の中で国土の在りようを描いた哲学を持ってぜひ地図上に自分の名前を残す仕事をしてほしい。そして仕事が完成した暁には堂々と自分たちの名前をどこかに残そうではないか。最近では大学の学科名から『土木』の文字が消え、今どきの名前が目立つようになってきた。淮南子の『築土構木』に由来するといわれるこの言葉の持つ意味を我々技術者は未来へと繋いでいかなければいけないと思っている。

とりとめのない思い出話に終始してしまい誠に恐縮であるが、私の拙い経験談がその一助となれば甚だ幸いである。